

研究ノート

『新撰讚美歌』の原詞について
(『新撰讚美歌資料集』に基づいて)

原 田 園 子

Summary

On the Original Hymns in *Shinsen-Sambika* Based on *Data on Shinsen-Sambika*

Sonoko Harada

The present paper is a report on the findings, made after *Data on Shinsen-Sambika* was published in 1993, of the origins of the hymns collected in *Shinsen-Sambika, Hymnal: Newly-Selected Hymns*, published in 1888 & 1890, and it constitutes a preface to another paper which is to be published in a book together with papers written by other people, with whom the present writer has been working, on different themes based on *Shinsen-Sambika*.

The original English versions of the five of translated hymns whose English origins were not known or not clear at the time of the publication of *Data* have been found and are specified with their lyrics. Six hymns are found to be shortened versions of original Japanese hymns written by a Japanese.

Also, questions concerning the origins of some hymns, which occurred to the present writer when studying *Data*, are dealt with. They are discussed in detail by examining the Japanese and the English versions of the hymns.

『新撰讃美歌資料集』(1993年7月)(以下『資料集』)では、『新撰讃美歌』(1890年)(神戸女学院オルチン文庫の整理番号により、以下69)に載っている各讃美歌の詞の英文初行から、あるいは『基督教聖歌集』(31)や『聖公会歌集』(50)にある英文初行、『新撰讃美歌 てびき』(1891)の記事、John Julianの*Dictionary of Hymnology*(1907)(以下Julian)やKatharine Smith Diehlの*Hymns and Tunes—an Index*(1966)(以下Diehl)を参考にして、原詞、あるいは原詞と思われる英語讃美歌を特定し、神戸女学院大学図書館所蔵の英語讃美歌集で69出版以前に用いられていたものから引き出し載せてある。この『資料集』によって、69に載せてある讃美歌の多くの歌詞の出所が明らかにされた。

しかし、翻訳讃美歌であるらしいと判断される詞の英原詞が分からなかったり、訳詞者や原詞の作者は分かったが、英原詞そのものが不明であったり、あるいは、訳詞か作詞されたものであるのか明らかでない讃美歌がまだ残されている。これらの点について整理しているうちに生じてきた疑問点や、『資料集』出版以降に、上記の資料に加えて、原恵氏作成(1992年1月)の未発表の一覧表(以下「一覧表・原」)や黒田惟信編『奥野昌綱先生略傳並歌集全』(1936年9月)(以下『略傳』)、そして他の英語讃美歌集を調べているうちに明らかになったことと、新たに特定できたり、手に入れることのできた英(原)詞について述べてみたい。

(一)

まず、不明であった原詞が分かり、その英詞が手に入り検討してみることができ、それが原詞であると確認することができた讃美歌がある。113番、148番、149番、193番、197番、248番、251番である。

「一覧表・原」に記されていることから、

113番は、Lydia Baxter (1809~1874) 作の詞 (cf. GH—15),

149番は、James Nicholson の1878年作の詞 (cf. GH, No.2—39),

197番は、Jefferson Hascall の1860年作の詞 (cf. GH—187) が原詞であると確認できた。『資料集』や「一覧表・原」に英原詞の作者が記されてはいるが、英詞そのものが引き出され得なかったもので、

148番は、Frances Ridley Havergal (1836~1879)作の詞 (cf. *Pilgrim Songs for the Children*, 1886—110),

193番は、Robert Lowry の1865年作の詞 (cf. *Happy Voices*, 1866—163),

248番は、Charles Wesley (1707~1788)の1763年作の詞 (cf. *Wesley Hymn Book*, 1958—107) を手にいれることができ、原詞と確認できた。

これらに加えて、

251番は、Charles Wesley の詞 (cf. *The Methodist Hymnal*, 1935—403) が原詞であるこ

とが新たに分かった。

其々の英原詞は69の讃美歌番号順に pp. 34～40に記載してある。

(二)

次に、今回、新たに、奥野昌綱の讃美歌であるらしいことが分かったものが数篇ある。『略傳』に奥野の遺稿の讃美歌として掲載されているもので、24番^{*}、98番、123番^{*}、154番^{*註1}、179番^{*}、180番^{*}である。

ここで、ひとつ、腑に落ちない点がでてきた。98番についてである。この詞は、その英文初行に星印が付されていない讃美歌のひとつである。69の巻末にある INDEX OF FIRST LINES (以下 INDEX) には、“星印はテーマのみを示す”と書かれてあるので、その英文初行に星印が付されていない詞には、英原詞があるということになると思われる。従って、98番は、その英文初行ではじまる英詞が原詞としてあるはずの讃美歌、つまり翻訳讃美歌であるはずである。『資料集』でも英詞が引き出されている。ところが、『略傳』では奥野の(創作?)讃美歌とされているのである。この詞について詳しく検討してみたい。

98番の讃美歌は、『略傳』では六節の詞^{註2}になっており、69にある詞では、その第五節と第六節が省略された四節の詞になっている。また、多少表現が異なっている部分もある。この二種の日本語の詞と、『資料集』に載せられている CHB—593の四節構成の英詞を比べてみると、日本語の詞の第一節第一行と第二行は、英詞の第一節第一行と第二行の訳になっており、第三行と第四行は英詞のそれらの行の意識となっていることが分かる。この同じ英語讃美歌を SCP—255の英詞で見ると、第一節の第三行が “There, till mercy speaks within” ではなく “There, till mercy lets thee in” となっているので、日本語の詞の第一節第三行 “めぐみのみでの戸をひらくまで” は、より英詞の語句の意にちかいものと分かった。残りの節は、二、三英詞の語句が活かされてはいるが、翻訳されたものとは言えず、作詞されたと考えられる内容である。これらの創作と思える部分に該当する内容が、この G. Grabbe 作の英詞のオリジナルには他の節があり、そこにあるのかも知れないが、残念ながら、Julian には、この英詞の節数については記されていない。従って、断定はできないが、この日本語の詞の残りの節は、英詞から何かヒントや、新たなイマジネーションを得て創作されたものとも考えられる。そうであれば、新たに作られたと思われる部分が多い詞なので、この日本語の詞は奥野の創作と言える讃美歌となり、英詞は参考にされたものとなる。

その他、『資料集』と「一覧表・原」において、奥野作と既に分かっており、『略傳』で確認できた讃美歌は、69番^{*}、95番^{*註3}、130番^{*}、167番^{*}、175番^{*}、191番^{*}である。

(三)

先にふれたように、69の讃美歌には英文初行に星印が付されたものがある。讃美歌の各頁に

書かれている英文初行と巻末の INDEX にあるそれとに付されている。ところが、この星印が一致しないものが何篇かあるのである。讃美歌そのものには星印があるが INDEX には付されていない^{*(1)}10番、^{*(1)}117番、^{*(1)}180番と、讃美歌には星印が無く INDEX には有る^{(1)*}204番である。印刷上のミスであるとも思われるが、これについてみたい。

10番は、その英文初行から英詞が引き出されているので、日本語の詞をそれと比べてみると、英詞に忠実な翻訳詞ではなく、また、その内容の抄訳あるいは意識とも言えない詞であることが分かった。しかし、英詞の語句が部分的に活かされてはいるので、翻案の詞と言える。その内容や表現が英詞に沿っていて、明らかに和訳されたものと分かり翻訳讃美歌と言える詞以外のものに、星印が付されたのだと考えるなら、この讃美歌は、その一篇であり、INDEX にも星印が付されても良いものである。

117番は、『資料集』では、“ルーミスと奥野との作もしくは訳”となっているものであるが、和訳の詞であるならば、英詞が見つからない讃美歌の一つである。「一覧表・原」では奥野作となっている。『略傳』には載っていない^{註5}ので、確認できなく疑問の残る讃美歌の一つである。

180番は、先に述べたように、『略傳』に奥野の讃美歌として載せられてもいるので、日本語による創作の詞として、INDEX にも星印が付されても良いものだと思う。この讃美歌については、後でもう一度取り上げる。

204番は、『資料集』では奥野作あるいは訳であろうとされており、「一覧表・原」では奥野作になっている。もし訳であるなら、これも、あるはずの英詞がまだ見つからない讃美歌であり、『略傳』にも載っていないので、これも疑問の残る詞である。

(四)

先に述べたように、星印は、“テーマのみを示”しているのである。“テーマのみ”とは、該当する英語讃美歌が存在しなくて、日本語によるオリジナルの詞であることを示していると思われる。しかし、この英文初行に星印が付されている日本語讃美歌に、英語讃美歌が引き出されたものがあるのである。これは、いったい何を意味するのであろうか？^{註6} この問題については、別稿で詳しく検討するが、今回、星印付きの詞についても英語讃美歌を引き出して、英詞そのものを入手することができたものがいくつかある。「一覧表・原」に記されていたことを参考にして引き出してみた^{*}68番と^{*}180番、そして新たに^{*}61番、^{*}119番、^{*}121番、^{*}182番、^{*}213番である。ここで検討してみたい。

其々の英詞は69の讃美歌番号順に pp. 41～47に載せてある。

68番は、「一覧表・原」で特定されていた G. H. Smyttan (a. 1825～1870) の英詞を *Hymns Ancient and Modern* (1924) から、引き出すことができた。日本語の詞は五節のものであるが、英詞は六節の詞になっている。検討してみると、日本語の詞の第一節は、英詞の第一節の訳になっており、残りの節は、英詞の語句の意味を活かしている内容のものである。この

Smyttan の英詞は、原詞であることが確認できた。

180番^{*}は、先に挙げたように、『略傳』にも奥野の讚美歌として載せられているものである。^{注7} 69の詞とは多少表現が異なる部分があるが、共に四節構成の詞である。英詞については、「一覧表・原」に参考として記されている、“Here, O my Lord (Bonar 作)” から、Diehl によって、Horatius Bonar (1808~1889) の1855年作の英詞を引き出した。“Here, O my Lord, I see Thee face to face” / “Here, O my Lord, I humbly seek Thy face” / “Here, Lord! by faith, I see Thee face to face” / “Here, O my Lord, I’d see Thee face to face” である。Julian に、この Bonar 作の詞のオリジナルは“十節の四行詞”とあるが、今回、調べることができた数冊の英語讚美歌集より引き出した英詞からは、合計九種の節しか集められなかった。これらの九節と、『略傳』にある詞とを比べてみると、英詞の語句を活かして日本語の詞の第一節と第四節が作られていることが分かった。これに、作詞された、あるいは今回調べることができなかった英詞の一節に結び付けられる、二節が加えられているようである。この英詞は参考にされたものと言える。

61番^{*}は、『資料集』と「一覧表・原」に奥野が原作者と記されており、『略傳』には掲載されていない一篇である。Emily Elizabeth Steele Elliott (1836~1897) 作の同じ英文初行で始まる英詞を *The Church Hymnary* (1898) から引き出してみた。この英詞の内容をみると、キリストについてのものである。一方、日本語の詞は降誕の日を歌ったもので、内容は異なっている。日本語の詞に与えられている英文初行と英詞の初行が同じなので、奥野が作詞するにあたってこの英詞から、あるいは、その初行から、ヒントを得たのかも知れない。この英詞は厳密な意味では、原詞とは言えないが、参考にされたものとも思える。

119番^{*}は、31—71の英文初行“Father, I stretch my hands to Thee”より、Chales Wesley (1707~1788) の同じ初行ではじまる英詞を *The Methodist Hymnal* (1905) より引き出してみた。この英詞は、四節の詞になっている。日本語の詞は五節のもので、その第一節、第二節、第四節は、其々、英詞の第一節、第二節の第三行と第四行の訳、第四節の意識／翻案とみることができる。しかし、第三節と第五節は該当する内容が英詞にはない。Wesley のオリジナルの詞はもっと長いもので、この第三節と第五節の内容に呼応する節が含まれているのかも知れないが、Julian には、残念ながら、この英詞についての解説はない。しかし、上記の点から、この Wesley 作の英詞は、この讚美歌の原詞と判断できる。

121番^{*}については、31-99の曲名 JESUS DEAR I COME を参考にして Emma A. Tiffany (生没年不詳) 作の“Jesus dear, I come to thee”ではじまる英詞を *Church and Sunday School Hymnal* (1902) から引き出してみた。作詞者の生没年は不祥であり、調べた英語讚美歌集も69出版以降のものなので問題はあがあるが、この英詞を検討してみたところ、英詞は、救済を願う内容のもので、日本語の詞の、救済された喜びを歌っている内容とは異なっている。ともに救済についてのものなので、日本語の詞の作者は、この英詞からヒントを得たのかも知れないとも考えられるが、二つの詞の間に直接的なつながりは見出だせなく、この英詞は原詞とは言えないようである。

182番は、『資料集』では奥野の作か訳であろうとされており、「一覧表・原」には奥野作と記され、『略傳』には載っていない一篇である。50-129の英文初行“God shall wipe away all tears from their eyes”より Diehl によって“In the land of fadeless day”ではじまる John R. Clements (1868~?) 作の英詞を *Sacred Songs No. 2* (1899) から引き出してみた。この英語讃美歌集に“*No Night There*”と題して載せられている英詞のコピーライトは1899年となっており、また、Clementsの没年が不明なので、やはり年代に関しては疑問が残るが、詞の内容を検討してみた。この英詞は、神の御国について述べている内容のものである。一方日本語の詞は、苦しみ憂う人へ呼び掛ける神の声を喜び歌っている詞である。しかし、その繰り返しに“なみだをぬぐわんとよべり”とあるので、英詞の繰り返しの節にある“God shall ‘wipe away all tears’”からヒントを得て作詞された讃美歌とも考えられる。そうであれば、英詞は参考にされたものとなる。

213番については、31-208の曲名 IS MY NAME WRITTEN THERE から Julian と Diehl によって、Mary Ann Kidder (1820~1905) 作の“*Lord, I care not for riches*”で始まり、繰り返しの節に“*Is my name written there*”とある英詞を *Sacred Songs & Solos* (1878) から引き出してみた。この英詞は、天を描き、救い主によるあがないを述べ、そこに入れられることを望んでいることを歌っている。日本語の詞も天国を描き、これを望むものではあるが、詳細は異なった内容のものである。しかし、共に、天国の記述があるので、日本語の詞の作者は、この英詞からヒントを得て作詞したとも考えられ、そうであれば、この英詞も参考にされたものとなる。

以上の七篇の日本語の詞と英詞との関係の仕方については、様々である。原詞とは言えない一篇を除く、今回英詞が引き出されたこれらの六篇を加えて、その英文初行に星印が付されているが、英詞が引き出されている讃美歌の、日本語の詞と英詞との関係について別稿で取り上げ、星印の意味するところを検討してみたい。

たへなるめぐみや みかどひらけ

There is a gate that stands ajar.

GH (1883) —15 The Gate Ajar for Me.

“The gates of it shall not be shut at all by day : for there

shall be no night there.” —Rev. 21 : 25.

- 1 There is a gate that stands ajar,
And through its portals gleaming,
A radiance from the Cross afar,
The Saviour's love revealing.

REFRAIN Oh, depth of mercy! can it be

That gate was left ajar for me?

For me, for me?

Was left ajar for me?

- 2 That gate ajar stands free for all
Who seek through it salvation;
The rich and poor, the great and small,
Of every tribe and nation.
- 3 Press onward then, though foes may frown,
While mercy's gate is open;
Accept the cross, and win the crown,
Love's everlasting token.
- 4 Beyond the river's brink we'll lay
The cross that here is given,
And bear the crown of life away,
And love Him more in heaven.

Mrs. Lydia Baxter (1809~1874)

きみなる耶穌よ けがれしわれを

Take my life, and let it be.

Pilgrim Songs for the Children (1886) —110

- 1 Take my life, and let it be
Consecrated, Lord, to Thee.
Take my moments and my days,
Let them flow in ceaseless praise.
- 2 Take my hands, and let them move
At the impulse of Thy love.
Take my feet and let them be
Swift and beautiful for Thee.
- 3 Take my voice, and let me sing
Always, only, for my King.
Take my lips, and let them be
Filled with messages from Thee.
- 4 Take my love, my Lord, I pour
At Thy feet its treasured store.
Take myself, and I will be
Ever, only, all for Thee.

Frances Ridley Havergal (1836~1879)

耶穌よここにやどりて われをみやとなしたまへ

Lord Jesus, I long to be perfectly whole.

GH, No. 2—39 Whiter than Snow

“Wash me, and I shall be whiter than snow.” —Ps. 51 : 7

- 1 Lord Jesus, I long to be perfectly whole;
I want Thee forever, to live in my soul;
Break down every idol, cast out every foe;
Now wash me, and I shall be whiter than snow.

CHORUS Whiter than snow, yes, whiter than snow;
Now wash me, and I shall be whiter than snow.

- 2 Lord Jesus, look down from Thy throne in the skies,
And help me to make a complete sacrifice;
I give up myself, and whatever I know—
Now wash me, and I shall be whiter than snow.

- 3 Lord Jesus, for this I most humbly entreat;
I wait, blessed Lord, at Thy crucified feet,
By faith, for my cleansing, I see Thy blood flow—
Now wash me, and I shall be whiter than snow.

- 4 Lord Jesus, Thou seest I patiently wait;
Come now, and within me a new heart create;
To those who have sought Thee,
Thou never said'st No—
Now wash me, and I shall be whiter than snow.

James Nicholson, 1878

わがふるさとのすみかは

My home is in heaven.

Happy Voices (1866) —163 Angels' Welcome

- 1 My home is in heaven, my rest is not here,
Then why should I murmur when trials appear?
Be hush'd my dark spirit, the worst that can come
But shortens my journey and hastens me home.

CHORUS Then the angels will come, with their music will come,
With music, sweet music to welcome me home;
In the bright gates of crystal the shining ones will stand,
And sing me a welcome to their own native land.

- 2 It is not for me to be seeking my bliss,
And building my hopes in a region like this;
I look for a city which hands have not piled,
I pant for a country by sin undefiled.
- 3 The thorn and the thistle around me may grow;
I would not recline upon roses below;
I ask not my portion, I seek not my rest
Till I find them for ever on Jesus' own breast.

Robert Lowry, 1865

ややにうつりきしゆふ日のかけ

My latest sun is sinking fast.

GH (1883) —187 The Land of Beulah

“Thou shalt be called Beulah, for the Lord delighteth in thee.”

Isa. 62:2

- 1 My latest sun is sinking fast,
My race is nearly run;
My strongest trials now are past,
My triumph is begun.

CHORUS O come, angel band, come and around me stand,
O, bear me away on your snowy wings
To my immortal home.
O, bear me away on your snowy wings
To my immortal home.

- 2 I know I'm nearing the holy ranks
Of friends and kindred dear,
For I brush the dews on Jordan's banks,
The crossing must be near.
- 3 I've almost gained my heavenly home,
My spirit loudly sings;
The holy ones, behold, they come!
I hear the noise of wings.
- 4 O, bear my longing heart to Him
Who bled and died for me;
Whose blood now cleanses from all sin,
And gives me victory.

Jefferson Hascall, 1860

わが主すくひのをさよ ここにをしへをうくる

Captain of our salvation, take.

Cf. *Wesley Hymn Book* (1958) —107

- 1 Captain of our salvation, take
The souls we here present to Thee,
And fit for Thy great service make
These heirs of immortality;
And let them in Thine image rise,
And then transplant to Paradise.
- 2 Unspotted from the world and pure,
Preserve them for Thy glorious cause,
Accustom'd daily to endure
The welcome burden of Thy cross;
Inured to toil and patient pain,
Till all Thy perfect mind they gain.
- 3 Our sons henceforth be wholly Thine,
And serve and love Thee all their days;
Infuse the principle divine
In all who here expect Thy grace;
Let each improve the grace bestowed;
Rise ev'ry child a man of God!
- 4 Train up Thy hardy soldiers, Lord,
In all their Captain's steps to tread!
Or send them to proclaim Thy word,
Thy gospel through the world to spread;
Freely as they receive to give,
And preach the death by which we live!

Amen.

Charles Wesley, 1763

いまはなれて わかれゆけど

And let our bodies part.

Cf. *The Methodist Hymnal* (1935) —403

- 1 And let our bodies part,
To different climes repair;
Inseparably joined in heart
The friends of Jesus are.
- 2 O let us still proceed
In Jesus' work below;
And, following our triumphant Head,
To further conquests go!
- 3 The vineyard of the Lord
Before His laborers lies;
And lo! we see the vast reward
Which waits us in the skies.
- 4 O let our heart and mind
Continually ascend,
That haven of repose to find,
Where all our labors end!

AMEN.

Charles Wesley, 1707—1788

69—061*

ダビデのすゑの ふたりはともに

There came a little Child to earth*.

Cf. *The Church Hymnary* (1898) —61

- 1 There came a little Child to earth
 Long ago;
And the angels of God proclaimed His birth,
 High and low.
Out on the night, so calm and still,
 Their song was heard;
For they knew that the Child on Bethlehem's hill
 Was Christ the Lord.
- 2 Far away in a goodly land.
 Fair and bright,
Children with crowns of glory stand,
 Robed in white,
In white more pure than the spotless snow;
 And their tongues unite
In the psalm which the angels sang long ago
 On that still night.
- 3 They sing how the Lord of that world so fair
 A child was born,
And that they might a crown of glory wear,
 Wore a crown of thorn,
And in mortal weakness, in want and pain,
 Came forth to die,
That the children of earth might for ever reign
 With Him on high.
- 4 He has put on His kingly apparel now,
 In that goodly land;
And He leads to where fountains of water flow
 That chosen band;
And for evermore, in their robes most fair
 And undefiled,
Those ransomed children His praise declare
 Who was once a child.

Amen.

Emily Elizabeth Steele Elliott (1836~1897)

69—068*

四十日ふるまで かてをたてども

Forty days and forty nights.*

Cf. *Hymns Ancient and Modern* (1924) —92

Lent

- 1 Forty days and forty nights
Thou wast fasting in the wild;
Forty days and forty nights
Tempted, and yet undefiled.
- 2 Sunbeams scorching all the day;
Chilly dew—drops nightly shed;
Prowling beasts about Thy way;
Stones Thy pillow; earth Thy bed.
- 3 Shall not we Thy sorrow share,
And from earthly joys abstain,
Fasting with unceasing prayer,
Glad with Thee to suffer pain?
- 4 And if Satan, vexing sore,
Flesh or spirit should assail,
Thou, His Vanquisher before,
Grant we may not faint nor fail.
- 5 So shall we have peace Divine;
Holier gladness ours shall be;
Round us too shall Angels shine,
Such as minister'd to Thee.
- 6 Keep, O keep us, Saviour dear,
Ever constant by Thy side;
That with Thee we may appear
At th' eternal Eastertide.

G. H. Smyttan (a. 1825~1870)

69—119*

主ならでたれにか たすけをこはん

Lord, to whom shall we go.*

Cf. *Methodist Hymns* (1905) —277

- 1 Father, I stretch my hands to thee;
 No other help I know:
If thou withdraw thyself from me,
 Ah! whither shall I go?
- 2 What did thine only Son endure,
 Before I drew my breath!
What pain, what labor, to secure
 My soul from endless death!
- 3 Surely thou canst not let me die;
 O speak, and I shall live;
And here I will unwearied lie,
 Till thou thy Spirit give.
- 4 Author of faith! to thee I lift
 My weary, longing eyes:
O let me now receive that gift!
 My soul without it dies.

Charles Wesley (1707~1788)

69—121*

くらきにねむる つみびとも

How happy is he whose heart is set free.*

Cf. *Church and Sunday School Hymnal* (1902) —215

- 1 Jesus dear, I come to thee,
Thou alone canst make me free;
Thou alone canst cleanse from sin,
Make me pure without, within;
Wounded at thy feet I lie,
Do not, do not pass me by.
- 2 Jesus dear, to thee I bring
All of earth to which I cling;
All the friends my heart holds dear
To thy altar now bring near;
Keep them safe within thy fold,
Grant them rest and joy untold.
- 3 Jesus dear, I come to thee,
Wilt thou all my refuge be,
Thro' the thorny maze of life,
Thro' the battles, thro' its strife?
When the final hour doth come,
Wilt thou guide me safely home?

Emma A. Tiffany (?)

69—180*

かみをみること あたはぬわれも

I have no fear, for Thou art near.*

Cf. CHB—910

- 1 Here, Lord! by faith, I see thee face to face;
Here would I touch and handle things unseen;
Here grasp, with firmer hand, th' eternal grace,
And all my weariness upon thee lean.
- 2 I have no help but thine; nor do I need
Another arm save thine to lean upon;
It is enough, my Lord!
My strength is in thy might—thy might alone.
- 3 I have no wisdom, save in him who is
My Wisdom and my Teacher, both in one:
No wisdom can I lack while thou art wise.
No teaching do I crave, save thine alone.
- 4 Mine is the sin, but thine the righteousness;
Mine is the guilt, but thine the cleansing blood;
Here is my robe, my refuge, and my peace,—
Thy blood, thy righteousness, O Lord, my God!
- 5 But see! the pillar-cloud is rising now,
And moving onward through the desert night;
It beckons, and I follow, for I know—
It lead me to the heritage of light.

Horatius Bonar, 1857

Cf. *The Church Hymnary* (1898) —415

- 1 Here, O my Lord,
- 2 Here would I feed upon the bread of God,
Here drink with Thee the royal wine of heaven;
Here would I lay aside each earthly load,
Here taste afresh the calm of sin forgiven.
- 3 This is the hour of banquet and of song;
This is the heavenly table spread for me;
Here let me feast, and, feasting, still prolong
The brief, bright hour of fellowship with Thee.
- 4 Too soon we rise; the symbols disappear;
The feast, though not the love, is past and gone;
The bread and wine remove, (c) but Thou art here,
Nearer than ever, still my Shield and Sun.
- 5
- 6
- 7 Feast after feast thus comes and passes by,
Yet, passing, points to the glad feast above,
Giving sweet foretaste of the festal joy,
The Lamb's great bridal feast of bliss and love.

なみだのたになる このよにさまよひ

Dry up your tears! God's cheering voice.*

Cf. *Sacred Songs* No. 2 (1899) —49

No Night There.

“For there shall be no night there.”

Rev. 21:25

- 1 In the land of fadeless day
Lies “the city four-square,”
It shall never pass away,
And there is “no night there.”

CHORUS God shall “wipe away all tears;”
There's no death, no pain, nor fears;
And they count not time by years,
For there is “no night there.”

- 2 All the gates of pearl are made,
In “the city four-square,”
All the streets with gold are laid,
And there is “no night there.”
- 3 And the gates shall never close
To “the city four-square,”
There life's crystal river flows,
And there is “no night there.”
- 4 There they need no sunshine bright,
In “the city four-square,”
For the Lamb is all the light,
And there is “no night there.”

John R. Clements (1868~ ?)

69—213*

わが主の御世ぞ うるはしかる

The glory of heaven that excelleth.*

Cf. *Sacred Songs and Solos* (1878) —285

Lord, I care not for riches,
Neither silver nor gold;
I would make sure of heaven,
I would enter the fold:
In the book of Thy kingdom,
With its pages so fair,
Tell me, Jesus, my Saviour,
Is my name written there?

Is my name written there
On the page white and fair?
In the book of Thy kingdom,
Is my name written there?

Lord, my sins they are many,
Like the sands of the sea;
But Thy blood, O my Saviour!
Is sufficient for me;
For Thy promise is written
In bright letters that glow,
“Though your sins be as scarlet,
I will make them like snow.”

Oh, that beautiful City,
With its mansions of light,
With its glorified beings
In pure garments of white;
Where no evil thing cometh,
To despoil what is fair;
Where the angels are watching:
Is my name written there?

Mary Ann Kidder (1820~1905)

注

注1 この154番^{*}は、既に「一覧表・原」でも奥野が原作者と記されている。

注2 玉の御門

- (一) つみをになへる 世のたびゞとよ
 シオンのかどに いそぎ行けかし
 めぐみの御手の 戸をひらくまで
 かしこをたゞき なげきていのれ
- (二) めぐみのきみの みゝをかたふけ
 なげきのごゑに みこゝろうごき
 そこにひかりを あらはすまでは
 さげびていのれ なきてたゞけよ
- (三) つみのおも荷を になへるひとよ
 なにをかなしみ なにをなげくや
 こゝにとどまり ゆかじとするか
 たびぢはつひに をはるときあり
- (四) こゝろのこしに おびしていそげ
 かなしみもなく なみだもあらで
 つねにかゞやく たまのみかどに
 ちゝは立ちてぞ まねき居たまふ
- (五) こゝろのみゝを そらにかたふけ
 はるかにひゞく すゞのおと聞け
 もはやみかどに いたりてそこに
 いまや入らんと するものあるぞ
- (六) いそげやいそげ 世のたびゞとよ
 よそこにゝろを 向くることなく
 たゞひとすぢに シオンのかどを
 さしてこの世の たびぢをいそげ 『略傳』 PP. 451—452

注3 この95番^{*}については、後に述べるように、英詞が引き出されているので別稿で扱う。

注4 この問題についても、別稿で詳しく検討する。

注5 『資料集』や「一覧表・原」で奥野作と記されている讚美歌で『略傳』に載っていないものは他にも20篇ほどある。そのうち、『略傳』に載せられている「基督の謙卑」と題する詞 (pp. 368~369) の第一節が、34番^{*}の第二節とよく似ている。

注6 上記の10番^{*}がその一つであるが、この讚美歌の日本語の詞は英詞の和訳とは言えなく、本稿では、翻案の詞と判断した。

注7 強き聖腕^{みうで}

- (一) かみを見ること あたはぬわれも
 かなしむときに かれをさゞふる
 つよきみうでの あるをぞ知れぬ
 たのむみうでは わがきみ耶穌ぞ
- (二) わがもろへの ことばゝわれの
 したをむすばせ のぞみはわれの
 目を閉づるとも かみはこゑなき
 こゑをも聞けば われ手をたれじ
- (三) われはかなしみ ものも言はれず
 しばしまどろみ またさめぬれば

あめのみつかひ　かたへに立てり
いざ手をあげて　わが神を呼ばん
(四) よしやくらきが　夜の間にそらを
かはらすとも　なげきがかぜを
あしくなすとも　つき日はみちを
てらさずなるも　かみはともなり　『略傳』 PP. 429—430

(本稿は、1993年度神戸女学院研究所研究助成による研究成果の一部である。)

(原稿受理 1995年9月11日)